

職業と人生を意識させる学生生活の構築とその支援方法

東京農業大学教授・前学長 進 士 五十八 氏

ご紹介いただきました、東京農大の進士と申します。どうぞよろしく。

ここに『職業と人生を意識させる学生生活の構築とその支援方法』というタイトルがありますが、これは今年度のこの学生生活の委員会の大きな活動テーマでして、あまり深い意味はございません。

私自身が学長だけではなくて、これまでの大学の運営に15年間くらい携わってきました。その間、たくさんの教職員と付き合ってきましたし、学生とも、それこそ三十数年、四十年近く大学生活を過ごしてきましたので、いろいろなことを感じてきました。そこで皆さんのご参考になるかどうかわかりませんが、私なりのものの見方や考え方を話してみたいと思っています。皆さんはこれが最後のセッションですから、これが終われば、あとは京都見学ができますから、一時間半だけ我慢して、私の話に付き合ってください。

折角、事務局がこのような資料を作っていますので、別冊資料の25ページをちょっと見てください。このようなことを言わないと、開かれないで棚に入ってしまう恐れがありますから、ほんのちょっと見ていただきます。

〔学生生活で得た貴重なもの〕という項目で、これは男子学生と女子学生に別れていて、この数字は女子学生の分だそうですが、たまたま11年度の調査結果が参考のために掲載されています。学生生活で得た貴重なものというのに『友人との出会い』が今回トップですね。これは11年度でもトップはトップですが、比率が60数パーセントから90パーセント近くに上がっているようです。それからもう一つ、『人間的成長ができた』というのがありますが、11年には50数パーセントあったのが、今回の調査では40パーセントをちょっと越えたくらいになっています。『専門知識など学問一般のおもしろさ』というのは、20パーセントから40パーセント近くまで上がっています。それに比べ、もう一つ興味深いと思ったのは、『教職員との出会い』というのがありますが、これは11年度では『気兼ねなく相談できる先生を得た』という表現になっていますが、これが今回大幅に増えて(4.1% 17.8%)いますね。まず、教員については、『教職員の出会い』が、『相談できる先生』になっていたのも、意味合いは違うかもしれませんが、ま

あ同じようだと考えると、少し教員の評価が上がったわけです。それでも20パーセント以下ですので、決して喜ぶべき数字ではありません。FDというものが盛んに行われるようになって、教員も少し学生に気を使い出して、学生との触れあいをしっかり意識するようになったという兆候が少し出てきたかなと思います。ただ、それにしても『友人との出会い』の方が圧倒的に高いというのは困ったもので、今の大学のおかれた状況というのを、このグラフは良く示しているだろうと思います。もう一つ、『専門的』とか『人間的成長』というのがありますが、これが教員とか職員を越えて、短大に期待されているものの重要な一面だと思います。専門はもちろん、人間性といっているのは、今日のテーマである“職業と人生を意識させる”ということでもあります。

資料集の102・103・104ページにレジメを入れました。今日申しあげたいのは、皆さんも私もそうですが、大学という世界にいと、ちょっと世間と違ったような意識にどこかでなっていて、よく言えば世間擦れしていないのですが、悪くいえば社会を知らないということがあります。私は、そこが一番大きな問題だと思っていまして、そんなことを主要なテーマとして考えてみたいと思います。

たまたま10月から日本学術会議の新しい会員が選ばれて、私はそれに任命されました。これまで学術会議というのは、研究者の団体だということは知っていましたが、今回メリットベースといいまして、従来はいろいろな学会の選挙で選んでいたのですが、今回は業績主義で、向こうから選んでくれたのです。全体で210名おります。私は今回の学術会議の会員に選ばれたことを、たいへん誇りに思っています。なぜなら、選挙ではないからです。業績主義だからです。これまで学術会議の会員といえば政治的に動いて、いくつかの学会で、豹のやりとりをして選ばれるといったことがあったようです。今回からは、そうではなく、業績で選ばれたということです。学術会議は今まで人文科学部門3部と自然科学部門4部の7部制の、専門分野に分かれておりましたが、今回、大きく括って3つの部にしました。いわゆる人文・社会科学と生命科学と、理工学の3部になりました。私はその第3部理工学に属し、環境学委員会委員長と編集の副委員長をしていて、結構忙しい。私はたまたま専門が町づくりですから、人文科学系や社会科学の人も自然科学の人たちも、それから今、姉齒さんが有名になってしまいましたが、いわゆる工学系の人たちとも、皆さんお付き合いがありまして、それが私自身にとっては、たいへん得な豊かな人生を与えてくれたと思っています。

一般に研究者というのは、非常に狭い専門分野を持っていて、そこだけで仕事をしているのです。私はよく専門家の職業病だと言っているのですが、自分の専門の価値観というのができてしまい、その価値観からしかものが見れなくなってしまう。今回の構造設計の話は、本来、建築基準法などという法律は、性善説に立っているのでありまして、ごまかしているのを見つけるような確認申請システムになっていないのが本当の処なのです。どんなに質の低い建築家であろうとも、鉄筋をいい加減にごまかして構造で手抜きをするなんていう人は出てこないという前提で制度設計されていたのです。建築を専門にしている専門の世界の中にだけ生きてきた人なら、姉齒氏のように考えないという固定観念が確立

していたからです。しかし、それが出てきた。ここが問題です。いわゆる大学で建築教育を受けた人ではないらしい、第一は、建築家ならこんなことはやりっこないと、内輪の論理で制度設計をしてしまった専門集団の甘さ、世の中には生活に困ればなんだってやる、という人間もいるという社会的認識が建築界には欠けていたということ。第二は、倫理教育に大学の貢献はあったということです。学歴で言うのではないのですが、単に仕事をこなせるようにする教育というか、儲け方本位の実務教育を受けた人ということと大学四年間、あるいは特に建築の場合、今多くの理工系学部はマスターが普通になっているので大学院まで教育を受け、本来は良い作品をつくるべきだと言われつつけた人の違いです。試験を受けていけば、構造設計の実務の建築士にはなれます。しかし、不思議なもので高等教育というのは、なんとなく本来の建築、建築家が目指すべき社会的意義を教育しているのです。これはもちろん学歴で得られるものではなくて、松下幸之助さんみたいな方やそれに類する人たちもたくさんいらっしゃいます。それにだいたい学校制度ができる前には、皆そうだったわけです。元来経験の中で、人間というのは徐々に成長しながら、本来の生き方を身に付けてきたわけです。ただ、姉齒氏があのようなことになってしまったのは、とにかく仕事をガンガンガンやって、そして狭い世界の、いわば構造設計屋さんになって、上手にごまかすのが自分の腕だと錯覚するようになってしまったのでしょうか。上手にやれているという、その部分だけで評価してしまって、それが当たり前になって、その結果、人々の生命や安全まで脅かすようなことになったのではという、そういう罪の大きさには、およそ目が向かなかったのでしょうか。たぶんそうだと思います。それは多くの仕事人にありがちな形です。ここは学生生活の研修会ですから、あまり関係はないかもしれませんが、他の分野、化学でいえば、いろいろな毒物を扱いますが、私自身も昔、化学をやっていたことがあるので、よくわかります。自分で毒物を扱っていると、その毒物がそんなに大した毒だとは思わなくなるものです。よく今のお母さんにいますが、子どもを砂場で遊ばせていて、子どもの爪の間に砂が入っただけで破傷風なると大騒ぎするような、そういう感覚だったら、化学の研究はできません。だいたい専門家というのは、その分野について、毎日毎日仕事をしているうちにそれに鈍感になるものなのです。特に毒を扱ったり、今のように危険や安全の問題になると、おそらくそこが職業的に麻痺してしまって、通常感覚はなくなってしまうのですね。それを称して、『慣れてきた』というのです。我われ人間は、長い人生を過ごしているうちに、慣れてきた、うまくなってきて味わい深くなってよかった、というふうに考えてきたわけです。実はこれが落とし穴なのです。我われは日々仕事をしていて、その中で当たり前になってきて、善と悪の区別も段々つなくなっていくわけです。少々の悪は、必要悪だと考えるのです。人間というのは、自分のすることを、全部合理化していくわけです。そうでないとノイローゼになってしまいます。次々、新しい仕事がかかるのですから。それをこなしていくのに、100%丁寧にやっていたら、おそらく建築確認指導主事だって全部あれをチェックしていたら、日が暮れてしまう、徹夜してしまうわけです。まあ、このくらいでいいだろうと言って、やっていますよ、みんな。だから一言でいうと、姉齒現象は決して彼個人の問題ではない、とそういうこと

です。今の分業化した社会が持っている危険性そのものなのです。分業化するということは、構造は構造の人に任せればいいのだと、だれも建築家自身はチェックしないのです。分業化が進むということは、最終的にそれぞれ一人ひとりが責任を持って行わなければ、世の中全体がおかしくなるという構造なのです。一人ひとりがトータルに全体をいつも見回してチェックしているような社会であれば、どこで問題が起こっても平気なのですが、分業化というのは、歯車の一部が壊れてしまうと、全体のシステムが壊れてしまうということなのです。ここが今の時代の怖いところなのです。ちょっとした停電でパニックが起こったり、今、中国の黒竜江省松花江では、ベンゼンを流してしまったといって大騒ぎです。ロシアの方まで影響が及ぶというわけです。環境問題は、国を越えますから、簡単にそのようなことが起こって、地球上、パニックが起こる。京都で行われました温暖化防止の条約というのはそれなのです。どこかで何かを行ったら、地球まで危うくなるという、そういうことなのです。

地球の話はでかすぎるので、皆さんの大学で考えていただいてもいいのです。大学一つ一つが生き残るとか、長持ちするとか、するためには、おそらくその組織のそれぞれがある程度自立的で、バランスのとれた行動ができるようになっていなければならない。そういう意味で、先ほどの調査で、教員の評価について少しポイントが上がったという言い方をしましたが、大学は教育機関ですから、当然教員が非常に大事な存在なのですが、まずここがだめになったのです。なぜ、ファカルティーディベロップメントを文科省がわざわざ通達を出してまで義務化したか、ということです。あのようなものは、従来の教授たちの言い分であれば、教育者・研究者というのは、自立的で主体的で、自分でやるものです。それを通達を出してやらせなければいけないような状況にしたのは誰か。そういう教授たち自身だったわけです。自分で教育して、自分で採点して、自分で行っているのに、何が悪いのだというのです。

私大連のほうで、教員評価の検討会があって、辞表を出したのだけれども、あと半年だけつき合えということで、6~7回出ております。この間、アルカディア市ヶ谷でそのセミナーがありました。私は理事を離れて気楽な立場です。その時、首都圏のS大学の先生が発言をしまして、私立大学連盟が進めている教員評価の評価というのは、既定の路線で、これではもう決まっているように見える、と言うのです。そうです、決めているのです。決めて進めようとしているのです。京都と東京でそれぞれセミナーを開いて、どのようなやり方がいいのかということを検討している。不思議なのは、そのS大学の先生は、そこへ自分の大学の教員評価の担当者として来ているのです。けれども、会場でこんなことは本当に意味があることかどうか根本から考えるべきだと言うのです。私は、大学の教授会では常にそうですから、そういうことを言う言い方はわかるのです。いつでも基本に戻るので、結構な話なのです。ただ基本から抜けないというのが問題なのです。社会がどんなに変化しても基本から絶対に抜けないで、いつも原点に回帰しているのです。それで済んできたのです。だからいつでも学生運動のときみたいなもので、元に戻って、そこからだけ発言する。私は、その場にパネリストとして参加していたのですが、司会者である委員

長が、イヤ～貴重なご意見をと言われたので、悪いけれど、貴重な意見ではないと思いますので、一言いいます、といて言いました。S大学の先生にはっきり言いました。

評価への潮流は自明のものです。教員が学生の評価をする。教育活動において評価をするということは、大昔からの原理なのです。簡単に言うと、学生の評価はするが、自分が評価されるのはイヤだというだけです。だけど今の社会では、第三者評価は今や義務なのです、法律上。そしてひとり教授たちが、評価の対象から外れることはあり得ないのです。ただ、それは私に言わせれば、それは本質論から言うとそんなことはしなくてもいいような大学であり続けるべきだったとは言えます。だけどそうではないから、さきほどの調査において、先生との付き合いが最高だ、100%だというなら、教員の評価なんてくだらない、評価することによってむしろ確執化をもたらすとか、独自性のあるユニークな教育法が侵されるのではないかという危険性を指摘するのは正しいのです。ただこんなに低い状態(数字)では主張できません。学生が教員を認めていないのですから。それは、そこまで落ちてしまった、教育現場の責任なのです。主体的に責任を果たさなければ、外部が評価して、何とか責任を持てるようにしようというのは、世の中の、先ほど言った社会のシステムとしては安全確保のために、止むを得ないことなのです。つまり何故、今、大学の第三者評価が騒がれているのか、これは一般の商品であれば、購買という、その商品を買ってくれるかどうかということで、評価を絶えず受けていたわけです。ところが、大学はそれが目に見えて出ておりませんでしたし、臨時定員をつくらなければいけない程、学生数がいつとき増えましたから、そんな必要はなかった。言ってみれば、どんな商品を出していても買ってくれたくれたようなものです。ところが今はその逆になってきて、大変厳しい状況になってきた。自ら、まず大学界そのものの、いわば信用を回復しなければならないということなのです。これが第三者評価です。ですから、うちの大学はよくやっているのに、なんでこんな面倒くさいことをしなければならないのか。私は四大の方の主査で、他大学に行ってやってきましたが、まあ～、分厚い資料を作って、無駄なことをやっていますよ、本当は。気楽に言うそうです。これは環境アセスメントと同じです。私は環境アセスメントの審議も、ズ～と、10年以上やってきましたから。こんなに分厚い資料を作って、誰が読むのだろう、これでどのくらい改善効果があるのかと思いますね。あまり、このような公的な場で言うてはいけませんが、基準協会を作って、お互い、法律になっているものですから、それをしなければいけないのですのですが、実際は形式的行為ですね。本当は、第三者評価をして、それが本当にフィードバックできたら、その大学はよくなると思います。つまり第三者評価というのは、生かすも殺すもその大学自身でしょう。手続きに生命をかける必要はありません。そこで出てきた問題や課題をどのくらい解決できるか、現実にフィードバックしてよくできるかが問われるでしょう。ところが多くの場合は、ああいうものは形式的に作って、作りあがったところで、完成なのです。ヤッタ！こんなに分厚いものができた、と言って皆に配って、やった、やったといて終わるのです。これはただ疲れるだけです。余分な仕事が増えただけです。環境アセスメントも随分やってきました。たくさんの調査をして、ここにはサンショウウオがでるだの、レ

ッドデータブックにある動物がいるだの言ってやっておりましたが、だいたい開発をすれば皆いなくなるのは当たり前なのです。だから、大きな組織、つまり近代的なシステムというのは、そのような欠陥が本質的に言えばたくさんあるのです。あるのですが、今言ったように、いまどきもう第三者評価を否定するという議論にはならないのです。あとはそれぞれの大学が、あれをどのくらい活かして実質的なものにするかということです。私自身は、そういう裏も表もというか、意味のあるところもあれば、ないところもあるが、付き合いだからやらなければならないというところもあるし、いろいろあるだろうと思います。そのようなところは大らかに包み込んで、理解した方がいいが、大事なことは本質論だと思います。

皆さんに贈りたい言葉だけ、わざわざメモしてきましたので、それだけ最初に説明して、具体論に入りたいと思います。102ページのところですが、トーマス・リコーナーという人が言っているのですが、このように文章で書くというキザったらしいことは我われ日本人は絶対にしないのですが、しかし人生の目標を私自身が思っているのと同じように、的確に言っているものですから、これを引用することにしました。人生の目標、これは皆さんのことです。皆さんご自身のことだと思ってください。私自身もそう思ってやってきました。人生の目標は3つある。一つは『自分自身を熟成すること』である。先ほど言いました姉齒さんが、いい仕事をして、がっぱり稼いできたのでしょ。う。だけどそれは、何かどこかでズレがあった。そのことを言いたいのです。自分自身を熟成して、構造設計を要領よく短期間にパツとうまくやるということが得意だったのですが、しかし、三つ目の『社会貢献を果たすこと』まで行っていなかったのでは、う。まず、『自分自身を熟成する』、つまり自分が自分らしく生きる、人間が人間らしく生きるということです。これを考えない人はいないと思います。つい漠然とは思っているのです。しかし、この言葉をわざわざ書くのは、皆さんとともに『自分自身を熟成する』ことが、人生の目標だということを自覚したいということです。我われはそういうことを考えずに日々過ごすのです。

特に二番目の、そういう熟成した自分が『他との愛のある関係を育むこと』、これが第二番目なのです。自分自身一つある。人間という字は、ヒトとアイダと書きます。自分自身の方はヒトなのです。二番目がアイダの方の、人間のゲンなのです。人間は自分だけで生きているのではなくて、色々な関係の中に生きているわけ。う。です。同僚や先輩・後輩やあるいは大学にとっては、学生がそうなのです。教職員がいれば学生がいるわけ。う。です。あるいは大学という世界そのものは社会と繋がっているわけ。う。です。こうやって自分だけではなくて、自分以外のもの、そういう一人ひとりの人間、あるいは集団と、愛のある関係を育むこと。う。だ。愛という。と、ちょっとアメリカ人っぽい、というか日本人には馴染みにくいのですが…。私は昔、『アメニティ・デザイン』という本を書いたのですが、アメニティという言葉をよく使います。アメニティというのは、もともと『愛』、ラブから始まる言葉。う。です。ラブがアモニタスというラテン語になって、これがアメニティという英語になります。快適な環境とか、心地良い環境とか、あるいは人とのいい関係、応接のよさ、

対応のよさまで含む。アメニティーズという礼儀正しいという言葉になります。つまり人間と人間の関係の中で、この愛というのはそういうものです。恋がついて、恋愛になるとちょっと違って、これは私の専門外ですから省略しますが…。愛と言うのはそういう意味合いだと思います。そのような関係を育むことが自分自身を高めることでもある。自分が自分らしく生きる、そしてそういう自分と他とのいい関係を作る。先ほど言いましたように、同僚、先輩あるいは後輩、学生たちと同じ位置づけで付き合うということです。愛のある関係を結んで、教員が日常、学生と接していれば、おのずから先ほどの調査結果に示されたグラフは高くなるはずなのです。

そして最後に社会貢献なのです。我われは自分自身を高め、人とのいい関係を作りながら、最終的な目標は、自分のためではなくて、社会貢献をすることです。この『自分のためではない』という言い方をするから、何かうそっぽいのです。偽善的に感じるのです。愛というのは、どうもキリスト教の専売特許のように感じるのですが、とても言いづらいたのですが、社会貢献を果たすという言い方は抵抗があります。ただ、誰かのためになっているということは、自分自身もいい気持ちになるということでありまして、そのくらいに考えればいいのではないかと思います。自分のためにもなるし、人のためにもなる、世の中のためにもなるのです。誰かのためになっていること自身は、自分が生きることの意味を実感させてくれるわけです。まずこれが一つ。

その次に、皆さんに贈りたい言葉は、『思想の種をまき、行動を刈り入れなさい 行動の種をまき、習慣を刈り入れなさい 習慣の種をまき、人格を刈り入れなさい 人格の種をまき、運命を刈り入れなさい』と言う言葉です。ある雑誌で読んだ論文に出ていましたので、ご紹介したわけです。これもちょっとキザっぽいのですが、私の大学は農業大学で、収穫祭というのがあります。種をまいて刈り入れるという言葉についてシンパシィを感じてしまうのです。思想の種をまいて行動を刈り入れる、つまり行動が当たり前になると習慣になりますし、習慣を続けていることによって、人間自身ができるようになっていくというわけです。そういう人間が実は運命を切り開くのでありまして、俺は不運だ、不運だといっているのは、実はこのプロセスが十分に機能していないということでありまして、自分なりの行動をきちんとし、それが習慣化すれば、おのずと人間というものができていって、それがその人に新しい役割を果たさせてくれる、人がその人間を育ててくれるわけです。しかしこの四つのプロセスを意識しないので、どうも俺は不運だと思ってしまうのです。全然役割を与えられてもいないし、機能もしない。これでは人生はつまらなくなってしまうわけです。

私が取敢えずこの二つを皆さんの頭の中に入れていただきたいと思いますのはなぜかと言えば、大学という世界は一体何が仕事なのだろうか、確かに、製造業であれば、物を生産するということですが、大学は物を生産しておりません。子どもたちを教育するということになっています。ところが教育を受ける子どもたちは、先ほどのグラフが示しているように、そこで専門的な知識を得たとか、先生とのふれあいが素晴らしかったとか、言っていないのです。友達ができるという。だったらクラブ活動でもさせておけばよい。たと

えば、‘クラブ活動大学’というようなものを作って、クラブ活動だけさせていれば、皆、触れ合いができていいのかもしれませんが。現実にはスポーツについては、今、日本政府は「ゴールドプラン」を実行して、コミュニティのクラブ形成を盛んに進めているのです。地域ごとに、スポーツクラブ、コミュニティクラブを作らせようとしているのです。それだけに所属していればいいのではないかということになります。そうではないはずなのです。102ページの下の方に書きましたけれど、今私が痛感していますことは、今の学生たちはどうも今いったような、上の二つ、トーマス・リコーナーとイギリスのある作家の詩ですが、こういう段階どころか、このような認識すら持っていないで入っている。場合によっては、我われ教員、職員も一緒にそのような状況にあって、これはかつて、家庭教育や地域教育というのが十分に機能していた時代、江戸時代、明治時代もそうですが、若衆宿というようなものがあって、大人になるということはどういうことだよ、という具合にいるいろなしつけを受けてきたのです。コミュニティの一員としての役割を果たすように、いわばトレーニングされてきたのです。ところが特に少子化に至って、子どもを大事にしたということもあるでしょうし、親たちもまた、そのような経験が十分になかったということもあったのでしょう。103ページの方にもちょっと書いておきましたが、私は学生と付き合い合ってきてつくづく思うのは、大学に入学するときは偏差値も高くなく、どうもぎりぎりであったり、補欠で入ってきた子どもが、意外としっかりと育って卒業していくということも見ていますし、つまり偏差値だけではないということが、はっきりと言えるような気がいたします。ここにも書きましたように、一つは生業(なりわい)をもった、つまり家業を持った、農大の場合は、比較的学科の構成が家業に近いということもあって、醸造学科とういのは、醸造業というのがあり、造園は、造園業というのがあります。そのような生業を、特定の専門をきちんと意識した学科構成になっているものですから、三百年続いた家業を背負ってきているというのが結構いるのです。このようなことは、最近では流行りにくくなって、少なくともなくなってきましたが……。家業を持つ家庭の子弟は、『門前の小僧経を読む』ということなのでしょうが、比較的、ガツガツとは勉強はしない。集団でゼミなどをやっても、だいたいお茶などを汲んでいて、まわりに気を配って、メインをやらないのです。都市デザインなら都市デザインのプロジェクトを与えたときに、司会をして、どんどんプロジェクトを完成させる、図面を引いたり、模型を作ったり、それをロジカルにリードするのはだいたいサラリーマンの息子なのです。家業の息子たちはそばに付いていて、参加しているのです。だけどそのようなことを繰り返しながら、モノになっていくのです。

資料集に書いたように、地方の農村で、祖父母もいる大家族の中で育ったような子どもには、私はこれを家風といっていますが、家のスタイルがあるのだと思うのですが、そのような生き方が、良きにつけ悪きにつけ、スタイルができていて、以外と安定感を持っているのです。経験的にそう思います。つまり、家庭の教育力の減退が、未熟児というのが昔ありましたが、ちょっと早く生まれすぎて、まだ完全でない子ども、今の子どもは、この未熟学生、というのにもヘンですが、要するに専門学習を受ける段階に至っていない、

つまりその受け皿、受ける体制ができていないのに、たまたま大学に来てしまったという気がしないでもないです。それが家庭の中で、家業とか家風の中である程度できている子どもは、放っておいても安心なのですが、そうでない子はなかなか足りない。平たく言えば、今の大学は、そこを補わざるを得ない立場にある。逆に言えば、それが仕事になってきたかもしれない。

103ページの下の方に書きましたが、これまで大学人というのは、学生の研究指導をやりたがる。短大であっても、とにかく論文を書かせたい。教員はもともと研究志向ということもありまして、研究指導をする。それに加えて教育指導が必要だといわれる。今の多くの現実、生活指導まで行わなければならないというわけです。この生活指導も教育指導も研究指導も、ひっくるめて人生指導をしなければならないのが今の大学なのです。これは家庭教育が悪いからだとか言っても仕方がないのです。日本の今の社会システムでは、最後の仕上げは高等教育機関が行うということになっている。短大も四大も、それを託されているわけです。しかしその自覚がないのです。やはり専門の先生方は、自分の専門教育を行うのだと思っているのです。栄養学の先生は、栄養学を教えるのだと思っているのです。そしてとんでもなくトラブルが起こって仕方がないので、止むを得ず生活指導も行うのだと思っているのです。そうではない。生活指導、教育指導、研究指導というのは、ばらばらにはできないのです。先ほど言ったように、未成熟学生なのです。ですから、それを全部まとめて行うしかないのです。研究だけが抜けているのなら、研究指導でいいのですが、そうではないのです。私は、それをどうやって行っていくかが、これから考えるべきテーマだと思っています。

この生活指導、教育指導、研究指導、人生指導をワンセットで行うのにもっとも簡単な方法は、体験型、参加型。別の言い方をすれば、フィールド型という、サイエンスでは、実験室で行うラボ・サイエンスとフィールド・サイエンスという言葉を使っていますが、社会、都市、町づくりなどという場合には、町歩きと称して、タウンウォッチングをさせながら、徐々に体験させるのです。インターンシップで、いろいろな実業の世界に学生を送り出して、そこで行うというのも一つですね。いずれにしても体系的に、授業のようにカリキュラムを組んで、イロハから始まって、XYZで終わるということを頭にたたき込んでダメなのです。しいて言えば、頭にたたき込むということを知で教育する。知で教育するというのと、もう一つ、感性で教育をするという二つがあります。我われ人間には、知性と感性のバランスが大事です。知はインテリジェンスですから、皆さんよくご承知でしょう。しかし、感性のほうは足りないのです。感性とは何か。感性というのは、モノの価値に気づく能力であり、感覚です。学生が先生の価値に気づくことです。友達の価値に気づくことなのです。今の子どもたちは、その気づく能力がないのです。ないというか、少ないのです。ないわけではないでしょう。感性というのは、モノの価値に気づく能力や感覚です。これを引き出してあげなければならない。そこにいる友達にいいところがあるということを学べば、できるだけ付き合おうとするでしょう。いいところは複数あるわけです。明るい人もいるし、地味な人もいます。いいのです。その多様性が

事なのです。いろいろなことを学べる友達がいるということも大事です。教員には、調子のいい先生もいれば、大真面目な先生もいます。それを見極める能力がいりますね、学生には。

教員評価を行うと、だいたいこういうことを言います。調子のいいというか、学生受けする先生の点数が高くなって、俺みたいな真面目な先生はダメだということになるから、教員評価、授業評価は妥当ではないという先生が必ずいる。それは間違いなのです。学生はそんなにいい加減ではない。ちゃんと見極めるのです。だから、地味だからダメだというのはない。それは根暗で陰気だからダメなのかもしれない。教え方がなっていないからダメなのです。私に言わせれば、いつも言うのですが、教員というのは自己中心的で、自分本位ですから、自分のやり方がすべて正しいとっていて、それを学生が受け入れるべきだと思っているのです。私はいろいろな会議に出て、いろいろな方の話も聞いていますから、つくづくそう思います。私が学生なら、この先生はアポイドする、もう結構だと思っただろうと思います。そういう方が、五万といます。だからFDも必要だし、教員評価も必要だというわけです。少なくとも相手が聞こうと思っているかどうかくらいチェックしながら、私もこうして、チェックしているのですが…、今のところ寝ている人はいないです、チェックしながら進めるものです。それを学生にお尻を向けて、ただ黒板にひたすら書いている人がいます。学生からどんな反応があろうが関係なく話している人がいます。あれは完全に自己陶醉型です。陶醉もしていないのでしょうけれど…。授業というのは、結局は学生とのコミュニケーションです。だからそれが自己中というのは、自分にだけ入り込んでいて、相手は関係ないのです。それでは向こうには伝わらない。ですから、そういう意味でやはり、本当に教員も変わっていかなければならないわけです。私は、先生方に別に落語家になれと言っているわけではないのです。ただ、学生に自分が考えていることを伝えたいという熱意だけは絶対に必要なのです。少々、口ごもっても構わない。なにをベラベラと、立て板に水のようにやれといっているわけではないのです。逆にそれだと、引っかからなくて何も頭に入らないかもしれない。淡々とでもいいのです。愛情を持って、まさしく先ほどの、愛を持って、相手に伝えるという努力をすることなのです。それは、私が学内で、学科運営とか、いろいろな様子を見ていて、そう思います。本当にこの人は、何のために生きているのだろう。論文を書くことだけ、一生懸命している人がいます。それ以外にどうも価値を見出していないようにも思うのです。

今の時代、大学というのは、研究より先に教育者であるべきだと盛んに、特に大学の理事者は言うのです。そうなのです。特に短大では研究ではなくて、教育。教育のために必要な研究を行うというのが、短大における研究の位置づけになっています。では、教育のための研究というのは、研究上二番の価値しかないかと言えば、私はそんなことはないと思います。独創的な研究はいくらでもある、逆に学生が参加しやすいような研究テーマを考えればこそ、のってくるということもあるのです。だから、教育を考えた研究の方が、よっぽど有効性があります。自分の頭で、ロジカルな遊戯をやっているような、論理学の研究みたいなものは受けません。フィールドサーベイだったら、学生は喜んでくれる。学

生が喜ぶようなテーマこそに意味があるかもしれません。ですから、動機はどちらでもいいのです。教育のために必要な研究をする。そのような研究をすることが、私は学生と一緒にになるということだと思うのです。以上だいたい言いたいことは終わりました。

最後104ページ、ここに、およそ6年間、私が学長をした時代に、それ以前に行っていることもあります。たまたま新しく興した例を記してあります。農大は三つのキャンパスがあるのですが、その一つである北海道にあるオホーツクキャンパスで、現代GPというのが採択され、最後の授業で行ったので、それを整理したものです。この中からいくつか、他の大学の皆さんにも参考になる発想法について少しお話をしておきたいと思います。

まず一つは、イベントオリエンテッドで発想するということです。私は今申しあげたように、大学の教育というのは、カリキュラムを組んで、シラバスを書いて、それを淡々と伝えることだと錯覚しているのではないかというのが私の考えです。昔の大学教育は皆そうです。帝大の授業ですらそうだった。ノートを作って、その古いノートを何回も読んでいるだけ。これはコピー技術が発達しなかった時です。先生が読むわけです。自分のノートに書いてあることをただ読んでいるだけ。本当にありましたよ。私が学生の頃はまだありました。毎年同じです。複製本でも作ったら売れるのではないかと思いますね。だから昔から教員は、ノートはできたか、と言います。新しい科目になると、また新しいノートを作らなければならない。ノートというのは、しゃべることをメモすることです。昔の本は、コピーがないから、全部写本といって、筆で写していったのです。写本屋というのができて、何部も作っていたのです。そういう技術が一方向的に高度化したのです。放送大学のプログラムがしっかりできて、放送大学の教材はしっかりできています。よくできているなと思っていたら、だけどその後は毎年同じものを放送しているのです。再放送です。あれを見ていると、やはり新鮮な方がいいなと思いました。今はありとあらゆる意味での教育機器が発達していて、繰り返すようになってしまった。途端にダメですね。大学というのは、マンツーマンで、その日の、この時間の講義をすべきなのです。しかしシラバスができてから、私は非常にやりにくい。昨日、国の審議会ですら話を話したいのだけれど、このような話をしなければならぬとシラバスに書いてあるから、できないのです。あれは何もしないで、学校の授業だけをやっている、あまり世間で受けられないような先生には都合がいいでしょう。同じことをしていればいいのですから。だけど私は、学生に伝えたいのですよ、今、現実を。それは専門の分野によっても違うでしょう。私みたいに、環境問題や都市問題をしていると、それこそ姉歯さんができてしまう。それを大学というところはカリキュラムを作って、シラバスを書いて、その通りやれといっている。その通りやっているかどうかは、授業評価で○を付けるようになっていきますから。それはそれでいいのですが、私が言いたいことは何かと言いますと、授業というのは基本的には、それぞれの、その時間、その先生の口から出ることが伝わることなのです。そういうエキサイティングな場所でなければならないのです。義務ではないのです。教員にとっては、

授業は本当に学生との真剣勝負なのです。真剣勝負でやれば、必ずのってくるのです。少なくとも8割はのります。それは、1割くらいはどうしようもない学生も場合によってはいるかもしれない。しょうがない、向こうにも事情はあるのだから。でも一瞬一瞬が真剣勝負なのです。そういう意味では、知識の伝達では決してないのです。先ほどの思想を伝えて、アクションを引き出すということです。何かFDみたいになってきましたね。

私の言いたいことは、授業は単に知識の、情報の伝達の間ではない。イベントだと。大学はイベントが大事だと思うのです。イベントというといろいろ誤解する人もいるかもしれませんが、これは町づくりや国づくりについてもいえるのです。例えば万博というのがあります。この間も愛知博というのがありました。博覧会が時々あります。しかも国際博をする。何千万と動員をする。あれは何かと言いますと、農大風に言えば、あれは春祭りとか夏祭りなのです。淡々と田植えをしてお米を育てていく、つまり日常を続けていく。するといい加減、疲れてきます、だれてきます。そういう時に、夏祭り、秋祭り、つまりイベントをやって発散するのです。発散するといってもいいし、本当は神に感謝するのですが、そのようなことをするのです。これはリズムです。人間の体にあるリズムでバイオリズムというのがあります。生き物にはリズムがあるのです。ほどほどにリズムがいるのです。

私は、あまりにも今までの大学は「ケ」だらけ、「ケ」というのは日常のこと、何も面白くないのです。進んだ大学ほど、農大なんかはそこにいくと立派ですよ、収穫祭をやったり、スポーツ大会をやったり、しょっちゅうやっています。やり過ぎかもしれませんが。最近では大学は体育はしてはいけないみたいに思って、体育祭なんてやらないとか、いろいろなことをしなくなった。先ほど言いました陰気な、くそ真面目な教員が集まるとそのようなことになるのです。農大でもありました、教授会で。収穫祭というのは、一週間授業を休講にして行ふのです。私は、収穫祭という、11月の始めの学園祭に向けて、その前ヶ月間、40日くらいの学生の盛り上がりというのをいつもウォッチングしていて、すごいと思います。その情熱とエネルギーたるや、大変なものです。もっと言えば、地元世田谷に落ちる経済的効果は、大変なものです。朝昼晩、食事をする。材料をいっぱい買ってくる。あのエネルギーはすごい。一万人の学生が40日間、フル稼働するのですから。これは地域にとっても元気になります。私はそのように集中的に出すエネルギーのすごさというのこそが、教育効果、あるいは教育のモチベーションを与えるものとしてとても大事だと思う。ところが、昔、俺の授業の2コマが減るからといって、反対した先生がいました。内心、先生の話は聞いてもしょうがないのじゃないの、自主的に頑張った方がよっぽど教育効果があるかと思っていました。本当につまらない先生ほど、そのようなことを言います。俺の授業が減るから、休講反対というのです。別にこれは農大の昔話ではありません。一般的に大学ではだいたいそういう先生が多い。教材は世の中にゴマンとあり、本もビデオもいっぱい出ていて、知識だけなら、よほど他の方がレベルは高い。先生の授業なんて、聞いたって仕方がないでしょ、と本当は言いたくなる。

つまり、大学というのは、学生と教員がそのようにぶつかり合ってコミュニケーション

ができる。しかも仲間がいるのです。学園祭だって実行委員会を作って仲間がいるのです。仲間同士、意見を戦わせることができるのです。一方的にここで私がしゃべる、皆さんが聞くというとだんだん眠くなるのです。し方がないです。だって自分がアクティブに動いたときに意味があるので、受身というのはつまらないものです。それをずっと強いているのです、大学というところは。本当に修行みたいなものです。つまらない授業を2年間、とにかく教室で聞けとっている。しかも授業料をとっているのです。こんな無茶苦茶な組織はないのです。だから私は、イベントが適宜あるということが大事だ。イベントオリエンテッドというのは、イベントを設定することによって、そこに引っ張っていくということです。つまり盛り上がっていくようにするということです。いろいろな形のイベントがあります。非常にアカデミックなイベントがあってもいいでしょう。専門的なシンポジウムみたいなものもやってもいいし、だけどそればかりだと、面白くない人もいます。相性が悪い人もいます。やはりお祭りのようなものもあったほうがいい。あるいは非常にアクティブな、スポーツのようなものもあっていい。いろいろ必要なのです。これが学生に対する愛情というものです。学生は多様なのです。教員が多様である以上に学生は多様なのです。

ところがだいたい研究者というのは、基本的にどこの大学でも論文の数で採用しているものですから、論文だけ、つまりペーパーをかせぐ、論文を書くという指向性のある人が多いです。でないと淘汰されてしまいますから。したがって、教員の方はかなりモノトーンになってしまいます。だから教員の体質でないイベントは組まれないことになってしまふ。ここが大事なところなのです。今日の会で言えば、スタッフディベロップメントが大事だというのは、そこなのです。教員は教員という色が付いているのです。そして志向性も似ている。考え方も似ている。今言ったように、イベントをすると反対するのです。授業をやった方がいい、授業の方が大事なのだ、何コマの授業が確保できない、とすぐに言う。そういうように、非常にカチンカチンにするのです。ついつい規範に当てはめるという方向にむかってしまふ。しかし学生のほうは、先ほども言いましたように、毎日毎日、ジーっと話を聞かされているわけですから、たまには主体的に動いてみたいわけです。しかも自分に合うことをやりたいのです。教員は自分が好きだからその専門をやっているのです。先生は自分が好きなことだからやっているのです。学生は嫌いだから学校にきているのですから。この違いをわからなければならない。学生は何も大学に好きできているわけではないのです。親が行けといったからとか、農大の場合は、親父も爺さんも農大だったからとか、いろいろあって来ているわけです。だから学生のことを考えるというのは、多様な発想をするということなのです。大学というのは講義中心の、つまり授業中心の、そのようなシステムだというように思い込んでいる。誰もそれに疑いをもたない。だけどそうではない。今の、例えば、デパートをみていると、スプリングフェアとかオータムフェアとか、春夏秋冬お祭りばかりやっている。〇〇セールというのもあります。いわゆる「ハレ」を演出している。やりすぎだとも思いますが…。それに対して大学は、十年一日、何も変わらない。だから大学生たちは外へ出て行くのです。だからこのような時代に

あつては、やはりイベントオリエンテートの発想も大事だと思います。私が言いたいのは、授業を無視しろと言っているわけではないのです。授業そのものの向上、充実は当然ですが、それしか発想の中になくというのはおかしいのです。

皆さんにお伝えしたいことが幾つかあります。104ページにまとめてありますが、一つは、『要請』と書きました。社会的要請とは何か。地球レベルで、世界レベルで、あるいは地域レベルで、産業側から言うと、学生側から言うと、というような切り口を書きました。そこでのキーワードを並べました。これは農大だからということではありません。ありとあらゆる大学が、その大学の性格によってその重みは違うでしょう。しかし、このような多面的な物差しをもっておくことの重要性を申しあげたい。今、大学は社会からいわば注目されている、別の言い方をすれば監視されている。大学は本当に役に立つのか、立たないのか、もう意味がないのかもしれない。あんなものに税金を使うな、ということです。文科省が現代GPというのをなぜ出したのでしょうか。去年からです。それまでの、グッドプラクティスとかCOEは研究の高度化、世界的戦略でありましたが、現代GPというのは、現代社会のニーズに応えるような、そのような大学教育を考えてくれといっているのです。つまり大学は現代ニーズと無縁にやっていると思っているからです。それぞれの先生方は、自分が倫理学なら倫理学だけをやる。アメリカ文学ならアメリカ文学だけをやる。ひたすらそれに命をかけているわけです。いいのです、それはそれで。しかし、それが総体になって、学科を作り、学部をつくり、そして大学になったときに、その大学は一体社会的要請の何に応えようとしているのか。大学はどのようなミッション、使命感をもってやっているのか、ということをおもな疑ってかかっているのです。大学に対しては、疑ってかかっているのです。金をどうやって減らすかという話がでているのです。文科省としては、なんとか社会的ニーズに応えているのが大学であるということを示したいわけです。そこで現代GPというものを始めたのです、と思います。私は文部科学大臣ではないので、そのように推察しているわけです。

そういう意味で『要請』と『キーワード』と書いたのは、共通して皆さんにお使いいただけるかもしれないと思っています。その事例分析といいましょうか、事例紹介が右の欄でありまして、例えば環境の時代ということで、私ども農大はISO1401を取得しました。ISOって何？ また学長がへんなことをやりだしたと思われた。ISO部屋という学生の集団もできました。学生のISOの学内監査委員、私は学生も大学にとって重要なメンバーだと思いますから、教員、職員に学生を加えたのです。学生側がむしろ意識が一番高く、活発なのです。アクティビティが高い。これがISO部屋(イソベヤ)というのを作って、活動をして、彼らは農大でのISO活動を地域のタウンセンターにいて、逆に市民を相手に公開講座をするようになったのです。私はこれを3キャンパスに広げることになりました。私はこの副次的効果を発見しました。

環境との付き合い方を規定するグローバルスタンダードですが、これを既存の組織と重ねて運営の組織を作ったときに、今まで陽の当たらない部門にいる人が元気だということがわかったり、若い人がいろいろ意見を言う。その分、忙しくなって、余分な仕事を作って

くれたという批判もあったようですが、しかし一方で別の面、先ほど私は人生の目標は自己実現にあると言いましたが、自分の中にはISO的なもの、つまりラインの仕事以外にスタッフ的な仕事、いわば世の中で動いていることとフィットするようなことを自分自身もやりたいという人はいるわけです。日常的にそれが経理であったり、あるいは施設であったりといった、それぞれの専門が職場の中ではありますが、いわばサブ・システムとっていますが、大学という組織はそれぞれメインのシステムしかないのです。この仕事だったら、ずうっとその仕事をやりなさいとっているのです。しかし人間というのはもともと色々なことをやりたいのです。私の考えはそれを百姓（ヒャクセイ）とっているのですが、百姓というのは、たくさんの名字、姓名の姓です。名字というのは、昔は職業を表しました。職業というのは能力です。ですから百姓というのは、たくさんの能力がないとできない仕事であり、たくさんの能力を發揮できる仕事だったのです。農民というのは種を蒔いて、野菜を育てるとか、米を育てるだけではない。村社会の運営、マネジメントもやった。イベントもボランティアもやった。道普請をしたり、あるいは相撲大会を仕切ったり、寄付集めをしているいろいろなお祭りをやったり、本当に社会性を持っていたのです。今の市民社会はそれがなくなってしまったのです。全部行政がやる。税金をとって、行政が肩代わりをしているものだから、一人ひとりの市民は家の周りの掃除すらしない。掃除をする必要がないから、お隣と声を掛け合うことすらしないのです。コミュニティが崩壊しているのです。

そのような中で、自分らしく生きるということは何か、人の間で生きるのです、人間は。ですからいろいろな人と付き合いたいわけです。ISOをやると全然今まで付き合いなかった職員同士が付き合うことになる。あるいは職員は一般にカウンター越しにしか学生と付き合わないですね、クラブでもやっていれば別ですが。多くの職員はカウンター越しに学生と付き合っている。本当の学生との人間的付き合いはないわけです。ISOをやれば、視察旅行で学生と一緒にいくのです。違う世界がそこにできるわけです。私はそのようなことが大事だと思っているわけです。私はなぜ、人生の目標などという唐突な発想を皆さんに申しあげるかと言えば、大学に席をおく職員であろうと教員であろうと、自分の人生は、そこで送っていくのでしょうか。だったら自分の大学における人生を自分自身の人生として、大きく育てなければつまらないのではないですか。アフターファイブに別の団体に所属して、そこで汗を流せばいいというものではないでしょう。職場そのものが皆さんの人生なのです。だったらその職場をもっと元気にして、楽しくやれるようにしようじゃないですか、ということをお願いしたいわけです。そういう意味で一つはイベント。そして例えばISOをやってみると、そのようにサブシステム、いろいろな関係が新しくできる。別の付き合いが始まるということです。そういうことを思いました。それ以外色々書いてありますが、省略いたします。

それからもう一つが、地域社会との関連です。地域性というところに書いてありますが、地域連携、これも文科省は、今年から自治体と連携した大学の研究活動に金を出すというのがありました。農大ではバイオマスでもらって、確か4億円くらいだと思いますが、今

年もらうことになりました。これは50%ではなく、100%です。そこが非常にいいところですよ。つまりこれは自治体との連携をしないさいというのが、研究計画の条件に入っている。いま農大では富士宮市、妙高市、上越市というところと、たまたま付き合っています。これはいくらでも拡大できるわけですが、バイオマス、つまり生ゴミからエネルギーを取り出すという研究をしているのですが、そのプラントを買って大学におくのではなく、それぞれの自治体につくることになっているのです。自治体の方は大喜びです。タダで機械を買ってもらって、ゴミを始末してくれる。当方はそれで研究が進むわけですよ。地元でイベントを組みます。富士宮では、フードパレー構想という町づくりの構想をもっていて、食べ物、食品関係の先生を呼んで、講座が行われるわけですよ。そうすると大学の中身が伝わっていくわけですよ。ですからちょっと小選挙区制に近いのですが、富士宮だけで行っても仕方がないのですが、全国的にしなければいけないのですが、そういう意味では大学のアピールにもなるわけですよ。そのようなことをいろいろしながら、社会と連携する。先ほども申しあげましたが、社会と連携して公開講座をすると何がよくなるかと言うと、FDに寄与することになる。さっき言った、後ろを向いて授業をしている人はそこでほしい評判が落ちるのです。出張講義でも人気のある先生を指名してきます。これはほとんど夜の飲み屋の指名と同じで、やはり面白くてためにならなくてはダメなのです。そこで教員の質が向上することになるのです。

それから、表の『教育的』のところを見てください。これも大分時間がかかって、私から言わせれば、想像を絶するほど時間がかかったのですが、クラブ活動の単位化ということを行いました。このときに一番最初の反対は、クラブというのは課外活動である。課の外で、正課の外で、正課の外に単位を出すということは何事だという意見です。ですから、私は課外活動だからおかしくなるのであって、それは課内だと、クラブ活動と読み替えればいいのではないかと、言いました。クラブ活動を単位化する。農大は殊にそうなのですが、長い歴史があって、私はクラブ活動に多大な期待を持っているのです。それは先ほど言ったような、人生の目標と重なるくらい、大学に今期待されているのは専門教育ではもちろんあるでしょうが、むしろ人間教育である。やる気を作らせる、やる気を引き出す能力、教育である。その面で実は専門の教員、専門課程の教員による専門教育だけではほど遠いのです。クラブ活動を通してこそ、実は人間教育が出来ると思うのです。これは先ほどの調査結果のグラフをみてもそうでしょう。『友達が出来ると』、友達が一番多いのはクラブ活動です。私は大学を卒業して、40年近くたって、つくづくそう思います。今もって人生長い付き合いをしているのは、クラブ活動での友達です。ですから、専門の教育を受けた仲間もないわけではないけれど、人生のかなりの部分、クラブ活動というのは、大きな意味を持っている。逆に重い意味を持つくらいの活性化したクラブ活動が必要だとも思います。このクラブの持っているよさというのは、先ほどらい言っていますが、今、一般に『挨拶もできない』と言われていて。入り口でいうと、そのアメニティズですね。礼儀正さとか、きちっ、きちっと、いい加減にしないで、ちゃんとしたリズムで生活するとか。もちろん人の気持ちを汲まなければ、集団プレーはできないでしょう。自己中の

今の子どもたちにとって、集団プレーというのはとても大事なことです。教室でただ講義しているだけでは、絶対にこれは教育できないことなのです。ですから、最初に申しあげましたが、現在の大学は戦前の大学とは違うのです。学ぶ姿勢が旧制中学でできているわけです。それが旧制高校、旧制大学にきたのですから、全部できて、人間もほとんどできている。だから研究主義の大学でよかったのです。今は生活する態度すらできていなくて入ってくるのです。そういう意味では、クラブ活動は非常に重要な教育方法の対象だと思うのです。ただ、やる気がなくて、単位だけ欲しくてくる学生がこられると僕は困るのです！とはっきり華道部の学生が言いに来ました。その時私は言いました。そういう子をどうやってまともにするのが、君たちに問われているのだと。きっかけは単位でいいのです。でも単位が欲しくて、一年間、2単位ももらうために大変です、クラブ活動は。だいたい長続きしないです。世の中というのは、そのことだけが好きで、命がけだという人ばかりではないのだよ、社会は。そうでない初心者はどうやって一人前にするのかというのが、それぞれのものがクラブ活動の重要な使命なのだと言いました。納得したかどうかわかりませんが、そのように言いました。クラブ活動はそういうことで、今年から単位化しました。これはクラブ活動だけではありません。ボランティア活動もそうです。つまり主体的に行動する。単位化というのは単なる手段なのです。これが長々、クラブ活動の先生方の集まりでは議論されていたようですが、私はそこに呼ばれなかったものですから、説明させてもらえなかったのです。説明したかったのは何かといえば、それは手段なのですよ、ということです。しかし、それが目的だと考えられてしまうのです。単位化が目的だと。大学人の社会性のなさはそこにあるのです。そうすると評価基準どうなるのか。何日クラブやったら、『可』になって、単位はどうやってつけるのかというように、いきなり細かいことから入るのです。私は、今、大学は何が大事か、子どもたちの置かれた状況、大学が果たすべき役割、そのような中でどのようなことをやったら子どもたちを元気にできるか、まともな大人にできるのかということだ。そういう時に、クラブという有力な武器があるのだから、それを活かそうではないか。クラブの単位化は手段なのです。目的はおとなにすることなのです。そのように全体で捉えるという目がないというか、そのようなものの見方がないです。いきなり評価基準はどうしようかとか、何でもそうです。今の悪いところは。

建築とか、ランドスケープもそうですが、デザイン系の学生の就職の時に、ポートフォリオというのをよく使います。ポートフォリオというのは、学生が演習とか実習で、このような作品を作ったということを写真などで記録して、ファイルしにして見せるのです。平たく言えば、履歴書です。自分が活動してきた履歴書で、就職の時などに見せるのです。大学の役割は、このポートフォリオを作らせるということです。一人ひとりの学生が入学してからどのようなことをやったのかという記録を、人間というのは、目の前でいくら顔色をみても、やってきたことが具体的にイメージできません。だからポートフォリオを見せるということは、彼が2年間、何をやったのかということが、企業なら企業に、あるいは親御さんにわかるということです。このようなことを一通りやってきたというなら、こ

のくらいのことはやれそうだという想像がつくし、逆に俺はこれだけのことをやってきたのだという量があれば、学生は自信を持てるわけです。この自信をつけさせるということです。おとなも、履歴書を書く、業績書を作るというのは、作家が本をたくさん出す、画家が絵を描く、研究者が研究論文を書くということなのです。一種の自分が生きてきた証を、この世の中に残そうと思って必死でいろいろなことをやるのです。しかし職業の中では、そういうポートフォリオを形にできない分野があるのです。大学の事務職員もひょっとすると、その一つです。でも私は、それをなくしたい。ポートフォリオが作れるようにして欲しい。私はこういうことをやったよ! ということを作って欲しい。

この委員会にきている荒井さんは、国際交流センターでいろいろ頑張ってきた方です。やや苦情が多く、少し文句が多いのが難ですが、逆にその分ちゃんとやるので信頼できます。世界学生サミットという、19カ国のいろいろなところから学生を呼んで年に一回東京農大でイベントをやります。そのまとめは彼が全面的にやりました。報告書を4冊出しました。ですから荒井さんはそのように報告書を4冊まとめたということ、ポートフォリオにきちんと明記すべきなのです。このようなことを、是非、大学の執行部は考えるべきかもしれません。内部で人事考課というのがあるようですが、上司が書くのでしょうか、仕事で判断しないのです。協調性があるとか、人がいいとか、そういうことしか書かない。何をやったかが問われるべきです。これからの大学の重要な課題はそれだと思います。何をやったかということです。

資料集の先ほどの表にも書きましたが、実践総合農学会で『食農と環境』という雑誌を出しています。私がこの学会を作ったのは、今の学問はあまりに細分化してしまって、よく見えない。それから研究というのは一人ひとりの人間がやっているのに、人間の顔を出さないですね。学会誌に個人の顔を出すということをしていない。だから私は人間がやっているのだということを見せるべきだと思うのです。そこでこのように大きな顔写真をこの学会誌は載せているのです。グラビアぐらい、一面に載せると言ったのですが、編集者がそこまでやるのはどうかとことでやってくれません。でもこの雑誌はカラーで、楽しく、「食農と環境」という全体像が分かる様にしようと思ってやりました。つまり私はアカデニズムもニューアカデニズムに変わっていくべきだ。学者というのは、それぞれの学会で字の小さい、誰も読まない、自分だけが書いて喜んでいてという論文を、しこしこしこしこやっているだけなのです。このように暗いことをやっていて、理系離れとか、いろいろ言われるのは当たり前ですよ。誰もあのような先生になりたいとは思わない。研究というのは面白いものなのだ、生き生きしているということを見せなければダメでしょう。だからロボコンは大成功です。ロボコンは全国の高専の学生たちが必死でやっていますよ。面白いからです。学問は本来面白いものなのです。本当は楽しくて仕方がないからやっているのです。このように楽しい仕事はないということです。それを伝えるときに、実は俺はいいややっているのだというような顔をして出すのが、大学人の悪い癖なのです。抑えて、抑えて、字は小さく、顔は出さないで、論文誌を出しているわけです。それは大学そのものもそうです。大学の出し方は今までどのようなことをやってきたか。“楽しい大学”

というキャッチコピーで書いている大学はないでしょう。高度なことをやって、最先端をやる。最先端なんてしんどいでしょう。だけど大学のキャッチコピーはみんなアカデニズムの、古いアカデニズムでまだやっているのです。

明るい大学というか、透き通る大学というか、人との交流といいますか、それこそスタッフとの交流がもう一つのシステム、つまり教員との付き合いで専門を学ぶというものもあるでしょう。〇〇さんというスタッフがいて、その人と出会ったというのが、その大学に入ってよかったということもあるわけです。それがこれから大事になるのです。大学は人によってできているのです。ですからそういうことが学生に伝わるようなことをやることではないかと私は思っています。FDもSDもみんな必要だし、これから皆さんいろいろと大変だと思いますが、結論的にやはり自分自身がいい人生をやれたという仕事の仕方を考えたらいいのです。それには学生を育ててやることです。

今、学術会議の雑誌『学術の動向』の編集副委員長をしています。その表紙は2006年1月号から顔が変わっています。第1号は黒川会長の顔です。黒川清さん(医学)はこう言うのです。彼は、アメリカのペンシルベニア大学ですっとやってこられたようなのですが、日本のアカデニズムの悪いところは何かということ、研究者は自分自身の研究の成果、つまり分かりやすく言えば人脈ですが、その幹を太くすることはばかりを考えている。自分の世界をどっしりと根を生やして、そこからたくさんのリンゴがなるようにしている。そうではなくて、新しい芽を吹かせること、新しい芽があちらこちらから育つこそこそ目指すべきだ、と言っています。日本のエスタブリッシュは問題だということを行っています。私はその通りだと思います。

私は、これまで付き合いきた、ある意味では育ててきたのですが、卒業生の顔を思い出しながら、結構楽しい人生を送ってきました。自分たちが付き合いきた子どもたちがどんどん大きくなって、背ではなくて、中身がです。豊かにになっていくのを見るのはうれしいものです。ものを育てる喜びというのはこれなのですね。是非そういう意味での大学のあり方を目指していただければと思います。

こんなところで、今日は失礼しますどうも有難うございました。

質疑応答の中から

私はたまたま化学会社の研究所に勤めていたことがあって、それから農大に入りなおしたのです。造園をやりたくてやりたくて仕方がなくて来たのです。やはりそれだと思ふのです。つまり一番大事なことは、自分が目標とするものを見つけてこれているかどうか。見つけていなければ、入ったところで、その気にさせるということです。今やっていることが、ものすごく意味があるよということを教えることです。学校の先生は、そこで生きることが素晴らしいことだということ教えることだと思ふのです。ところが知識を教えようとするのです。私が見ている限り、つまらない人間ほど、いっぱい知識を持っているということをひけらかしているのではないか。それから資料をやたらに配る人もいます。たくさんコピーして配っている。あれは飽食の時代で、食べ物もそうだけれど、知識もや

たらに貰ってもありがたくも何ともないですね。それは、なんと言ったらいいのでしょうか、教育のプロにはなっていないような気がします。私も自分で教育のプロだとは思いませんが…。

造園界というのが非常に小さい世界で、未開拓だったのです。本屋さんに行くと、辞書のところで建築工学や土木工学は本が並んでいますが、当時、造園とかランドスケープというのは本がないのです。そこで辞書づくりから始めました。そのようなことで私自身は、いわゆるメジャーなところへ行ってはだめだ。マイナーなところへ行け。これは生態学ではニッチと言います。すき間です。すき間産業ですね。すき間を狙うことです。人生豊かに生きるのはすき間だ。みんなメジャーでは…。うちの野球部の監督がこのフロアーに來ています。野球部みたいなメジャーなところは大変です。人の3倍くらい頑張っているのですが、なかなか優勝できませんね。ところが、北海道などで行われているカーリングなどでは、スッとオリンピックに出られてしまう。

私自身、尊敬できる方々に出会ったというのは、とてもうれしいことで、今の財産です。ですから、私は学生に言っています。君らは同級生としか付き合わないだろうが、とにかく年寄りと付き合えと。年寄りは時間が有り余って仕方がないから、いっぱい話してくれる。だから年寄りと付き合いなさい、としみじみと言っています。私の恩師は、夜の11時、12時まで、先生自身がいろいろ話をしてくださるので、私はそれを一生懸命聞いていました。そういう意味で、私は、大学という組織のすごさというのは、教員の構成が、例えば頑張るからと言って、若い先生だけでもダメなのです。年寄りも、女性もいなければいけない。ここでも多様性なのです。キーワード風にいえば、<多様性>なのです。

私もこの委員会の委員長をしていたのですが、この研修会は参加型で、委員がみんなでやると。私が思うのは、いつも大学というところは失敗を嫌って、無難な人に全部やらせるのです。だから、たとえばこのようなところの司会は、あの人がお上手とか。では下手なのは、ずっと下手ばなしです。だけどそのような場を与えられれば、そこでまた成長するのです。だから大学は、学生だけを育てるのではなくて、教員や職員を育てなければならぬ。育てるためにチャンスを作らなければならないのです。ただ、私自身はチャンスをつくるべくいろいろやり過ぎて、これ以上参加させないでくれと言われました。嫌がられました。でも、私はそれは大間違いだと思うのです。皆、仕事はいやだいやだと思って、できるだけ他所に振り分けたい。それは極限状態に仕事が多いと考えるかもしれない。私も手帳は本当に真っ黒ですよ。朝から晩までいくつも。でもそれが楽しいからやっているのです。ですからそのような楽しい仕事を行うためにどうやって組織を変えていくのか。ピラミッド型の組織をもう少し水平型にしたり、それは自己改革なのです。みんなが本当にエンジョイできる体制を、大学という世界でも作らなければ、その組織全体のパワーアップにならない。これは理事者でもそう考えなければやっていけないのです。わずかなスタッフで、まさに大きな強い力を出さなければならない。少数精鋭でやれる体制作りをしなければいけないのに、昔となんにも変わらない組織でやっている大学が結構多いです。

昔のことを後輩に伝えて、後輩はまた先輩が言った通りにやるのが正しいと思っている。大間違いです。社会は大きく変わっているのですから。そういう意味でこの会は学生生活指導研究委員会の委員の皆さんが全部役割分担をする。狙いはそこにあるのです。だから私は皆さんのお勧めしたいのは、大学の仕事は、本当に順繰りに皆がリーダーシップを発揮できる場所を次々与えて、皆、啓発していく、レベルアップさせる、スキルアップするというのが一番大事なことだと思います。平均的に上がらなければ、大変なのです。頑張る人だけが背負ってしまう。と同時に、一方で頑張らない人が感謝しているかと言えば、感謝していないのです。彼は好きだからやっていると思っているのです。だから皆一緒にやるといいのです。

職業と人生を意識させる学生生活の構築とその支援方法

東京農業大学教授・前学長 進 士 五十八 氏

大学は人間を“大人”にするところ。初歩的学問を教える“小学”に対し、修己治人の道を教える最高学府が“大学”である。

人生の目標についてトーマス・リコーナは、

自分自身を熟成すること
他との愛のある関係を育むこと
社会貢献を果すこと

と整理している。

そのための道筋をケヴィン・ライアンはあるイギリス人作家の詩を引いて次のように示唆している。

「思想の種をまき、行動を刈り入れなさい
行動の種をまき、習慣を刈り入れなさい
習慣の種をまき、人格を刈り入れなさい
人格の種をまき、運命を刈り入れなさい」

以上は、正に意味ある生活、豊かな社会の実現を目指す人間を養う“人格教育”の本質を説いている。

ひとが大人になるためには、技術・学術・芸術を学び、併せて素養・教養・修養・休養が不可欠である。ふつうこのように専門の技学芸を修得した上で、人格教育も大切というスタンスでこれまでの大学教育はすすめられてきた。

ところで、私が思うには最近の学生諸君の育ち方、来し方を考えると、それでよいのか、逆ではないのか、という気がする。前述したように人生の目標、自らの行動と自分なりの運命の開拓といったことを、子どもの頃からの遊び、体験し、家庭、社会教育の中で、常識レベルであったとしても、ひと通り体験的に学習してきていれば、知的好奇心と如何にも上級学校（高等教育）へ進学したという実感を与え、学習意欲や積極的の人生意欲を得るため特定の専門的知識を受け容れ易かったと思う。

しかし、いわば「生きる目的・目標」をわかっていない若者にその手段でもある「専門的技術・学術・芸術」を学ばせようとしても無理がある。しかも、若者たちは飽食とモラトリアム状況にあって、自らが何故「働かなければならないのか」を切迫感をもって自覚できる状態にもないのである。

村上龍『13歳のハローワーク』(2003年、幻冬舎)の重要性がここにある。人が生きることは、マズローの欲求段階説のように、食・衣など生存と防御のための動物生存条件：生理レベル、が基調である。その上に、働くこと、働き甲斐、仲間、連帯といった社会レベル、そして生き甲斐、自己実現、美しく生きる、といった精神レベルに向う。ところがこれまでの豊かな日本の社会保障と経済福祉政策、が第一段階を無自覚なままクリアさせてしまった。従って第二、第三段階への適切な積み上げができないのではないだろうか。

そこで最も重要なことは、生理レベル、動物としての人間としての原体験で人生の基礎力をしっかりと構築することである。リアリティのある体験やトレーニングが不足の上に、知識偏重の教育を幾ら施しても意味がない。吸収しやすい環境条件を整えて施肥しないと、肥料が栄養にならないのと同じである。

サラリーマン家庭とはちがって、明確な生業と営みの実体を持つ、いわば「家業」をもつ家庭の子弟をみていると、「門前の小僧経を読む」せいか、学ぶ態度が出来ていることが多い。

同様に、地方の農村地帯の何代もつづいた家庭、祖父母のいる大家族のなかで育った子女も安定感がある。家風 家のスタイル、生き方が、良きにつけ悪きにつけその家のスタイルという基盤が存在することは、その上に変革、発展の可能性があるということである。

以上の事例の意味は 人格教育・人間教育の先行、その方法としての体験教育の重視、そのため教育体制としての学生生活指導の重要性、その実施に際してはカリキュラム・シラバスの内容、順序、教育方法上の工夫、変革の必要性があり、 今後は大学運営における教員・職員の一致協力体制づくり。たとえばFD・SDの一体的運営による「学生育て」を同一目標とした本格的検討への着手、手引書の作成、新型指導者(生活指導+教育指導+研究指導=人生指導の達人)の養成なども視野に入れる必要があらう。

要するに、従来の高等教育システムの一部修正による対応ではすまない「まったく新しい人類の育て方」を担う大学像が求められているのである。

東京農大これまでのチャレンジ——トータルアプローチの重要性

要請	キーワード	東京農大・新世紀に向けての取組事例
地球的	環境 生物多様性 自然再生	サンワ緑基金寄付講座・環境教育、「環境共生宣言」、「環境学生」の商標登録 環境実践学生大賞、エココン、3キャンパスISO14001認証、エクステンションセンターに環境教育支援センター設置 ネーチャーファイントレイル、ビオトープ、エコテックゾーン、リサイクル研究センター、バイオマス研究センター
世界的	国際化 情報化	姉妹大学18、世界学生サミット（毎日新聞社持続可能な社会創造委員会との共催）、学生フォーラム、GP、次世代農業者教育のグローバルネットワーク、GCHERA、Golden Fortune賞、ISSASS、総研国際協力部、学生サービス国際教育支援課、世界農業ジャーナリスト日本大会2007ホスト校、カムカムジュースの開発普及
社会的	都市化 市民化 NPO	厚木キャンパス新設、都市農学、「農」啓発図書250冊（出版会ほか） バイオサイエンス学科、国際バイオビジネス学科、バイオセラピー学科、アクアバイオ学科新設 エクステンションセンター、カレッジ講座、一流講師の公開講座
地域的	地域性 地方性 大地性	オホーツク学の展開（現代社会のニーズに対応）、地域連携（富士宮市、妙高市、上越市）Pj.、 3キャンパス写真集、オホーツクの本、北の大地の生物生産、資源研Pj. 食と農の博物館、オホーツク展シリーズ、地域指定校制、東京都私立短大協会コンソーシアム 世田谷6大学コンソーシアム、厚木単位互換、オホーツク圏大学連携
産業的 (農業)	地揚性 経済性	東京農大メイヤーズ会議・シンポ、教育者会議・シンポ、経営者会議・経営者大賞・講義・バイオビジネストップランナーのシリーズ本・客員教授、毎日農業記録賞高校生部門に「東京農業大学賞」、JABEE対応学科増強、バイオインダストリー東京農大などベンチャー、地域連携によるオホーツク学の展開（現代ニーズGP応募）
教育的 (学生的)	高質化 情報化 FD	エコキャンパス、キャンパス美化と経堂門修景、ITスタンド、学生サービスセンターによるキャンパス同時同質サービスの提供 授業評価、教育評価、学生ポータルシステム、FD全学委員会によるFD活動、体験のススメ（クラブ活動の単位化）、バイオマス研究センターで地域連携協定、ゴミ分別システム、演習林の間伐材によるベンチ
研究的 (研究者)	高度化 戦略化 総合化	14専攻大学院フルコースドクター化、連携大学院協定、社会人優先環境共生学専攻開設、 オール農大の総合研究戦略と役割分担（6研究所学部戦略化、総研4部制による研究機能の強化、科研費申請数増加運動、 先端研究プロジェクト等、研究長期ビジョンの明確化）、実践総合農学会、『食農と環境』誌でニューアカデミズム構築
大学運営的	企業的 SD	学部単位会計、プロジェクトチーム方式、広報部設置、H.P.の充実高度化、東京農大出版会の活性化、東京農大ホームカミングデー3代表彰、教職員ポータルによる情報共有、3キャンパス一元化、SD,FD研究会、大学間競争時代の大学運営システム研究（を！）、オープンキャンパス強化、小田急車額常設、出張講義、U.G.サトー表紙デザイン

（進士 2005.6）